

# 「人と違う道」で得たもの

## 日本研究の今Ⅱ②

### 現場へ!

日本では中1から不登校と引きこもり。でも米国に渡りチャンスをつかみ、米プリンストン大で助教授を務める人がいる。

森本涼(41)は中1で地元岡山県倉敷市の中学校に行かなくなった。不良グループの子たちとけんか騒ぎを起して児童相談所に短期間入る。出た後、不登校に。「理由はよく覚えてないんですが……。『普通は』学校には行くものだ、『普通は』勉強はするものだ、そういう『普通』に納得いかなかった」。友

人のいた不良グループはきつい上下関係が疑問だった。人目を避け昼間は外出せず、あつという間に昼夜逆転し、自宅でゲームにふける引きこもり生活に。「親がせめて高校だけはと」無試験の職業訓練校に進学。ここには通ったが卒業が近くなり、考えた。「中学以降勉強していかない。勉強したい」。だが受験勉強をしていない。たまたま書店で留学雑誌を見つけた。米国の大学なら英語を勉強

すれば入れるかもしれないと、皿洗いのバイトで稼いだお金でまず語学学校に留学した。「自分は人と違う『普通』を生きてきたからもの見方も違う。日本ではそれはマイナスだけど、米国ではプラスに評価された」。マサチューセッツ州のブランドイス大で文化人類学を専攻。「人間の社会的、文化的活動を研究すればいいという懐の広さにひかれたし、日本人なのに米国という異文化で過ごしてきた自分だからできる研究もある気がして」

生活を共にするなかで、多くの人が次第に話をしてくれるようになった。南相馬と原子力の発展と事故をテーマに博士論文を書いた。福島通いと研究は続け、それらが評価されて18年、プリンストン大に職を得た。わかったのは、「汚染されたら土地を去ればいい」「賠償を受ければいい」と簡単に言えない人々の歴史や生活の積み重ねだった。「先祖代々開墾し、住み続けてきた土地に特別の思い入れや愛着を持って暮らす人たちがある。伝統や誇り、文化の蓄積がある」「次の世代にこの土地を引き継いでいく責任があり、汚染されたからといって去ることはできない人もいる。しかも賠償金は地域に分断も生んでしまった」

①森本涼。引きこもりの時以来、髪の毛は自分で切っているという＝山口県下関市  
②米国留学したばかりの頃＝本人提供



森本と、世話になった地元の女性。「僕の福島のばっば(おばあさん)です」。南相馬では多くの人と交流した＝2019年、福島県南相馬市、本人提供

博士課程の時に東日本大震災が起きた。ポランティアや通訳で現地に入る。忘れられない出会いがあった。福島県南相馬市のお寺の奥さんだ。震災による無縁仏を引き取っていた。「南相馬にはね、放射能オバケがいるんだよ」。そう言われた。南相馬市は東京電力福島第一原発事故で放射能汚染があった。「え、何?」と聞き返すと、「あんだ学者でしょ、住んだらわかるよ」。

森本は震災2年後の2013年8月から1年間、同市で過ごした。農家に住み込み、地元行事や郷土史研究会に参加した。今年、研究をまとめた書籍『Nuclear Ghost』(放射能オバケ)を米国で出した。きっかけとなった奥さんはすでに亡くなっていった。放射能オバケの正体は? 「放射能にばかり注目するなかで、見えなくなってしまう住民の生活、ということかなど」。外にいる日本人だからこそ見えることもあった、と感じている。今後は、災害ロボットをテーマに研究する予定だ。もちろん南相馬には通い続ける。

敬称略(編集委員・秋山剛子)